

# 『アントニーとクレオパトラ』とエジプト

## —近代初期英国におけるエジプト表象と劇作家の手法—

勝 山 貴 之

### I. 序

1608年5月20日に「アントニーとクレオパトラ」と題された書物（“A book Called. Anthony. & Cleopatra”）が書籍商の登録を受けている。この書物がシェイクスピア作『アントニーとクレオパトラ (*Antony and Cleopatra*)』であったと一般に考えられているものの、正確な創作年代を知る術はない。サミュエル・ダニエル（Samuel Daniel）は、何らかの形でシェイクスピアの劇を知り、その影響のもとに自らの手になる「クレオパトラの悲劇（“The Tragedie of Cleopatra”）」（1594年初版）に加筆をほどこして、1607年の改訂版としていることが、現在では知られている。だとするとダニエルの改訂版出版以前、おそらく1606年あるいは1607年のクリスマスまでには、劇が完成されていた可能性が浮上する（Wilders 69-75）。シェイクスピアが『アントニーとクレオパトラ』の制作に取りかかった時代、エジプトとはどのような国として英国人の目に映っていたのか。近代初期の英国人がエジプトということばを耳にする時、果たしてどのような想像を思い巡らせたのであろうか。

この論文では、まず古代の歴史家ヘロドトス（Herodotus）より伝わるエジプトの風俗習慣が、近代初期英国でいかに受容され、また16・17世紀に出版された旅行記や見聞録のなかで、エジプトがどのような国として語られてきたのかを辿ることとする。様々な資料を繙くことによって、近代初期英国におけるエジプトの表象は、古代から語り継がれた知識と新たに伝搬した

情報が、錯綜するかたちで形成されていたことがわかる。更に、祖国エジプトを離れ、流浪の民となって英国国内へ流入したエジプト人たちが、英国社会とどのような関わりをもったのかという問題へと論を進め、エジプト人を弾圧しようとする法令の発布や悪漢文学 (rogue literature) と呼ばれる文学ジャンルの検証をとおして、英国内における彼らの表象を明らかにしていきたい。そのうえで、作品『アントニーとクレオパトラ』の創作に際して、当時の英国社会に蔓延していたエジプト表象を、シェイクスピアがいかに利用・展開することによって、舞台上のアクションに観客の関心を惹き付けようとしていたのかを解明し、そのための劇作家の作劇上のテクニックについて考察を進めていくものとする。

## Ⅱ. 近代初期英国におけるエジプトのイメージ

### (1) 男女の立場の逆転した異文化国家

ドイツの人文主義者で旅行家でもあったヨハン・ボーマス (Johann Boemus, or Bohn, Bohemus) は、1520年に著書 *Omnium Gentium Mores, Leges et Ritus* を出版している。この書物は、1555年ウィリアム・ウォーターマン (William Watreman) によって翻訳され、『様々な風俗 (*The Fardle of Facions*)』という題名で英国に紹介された。<sup>1</sup> 更に1611年には、新たな翻訳が『すべての国のしきたり、法律、習慣 (*The Manners, Lawes, and Customes of All Nations*)』という題名で出版される。繰り返し翻訳がなされ、書物が世に出たことを考えると、異国との交易が盛んになりつつあった時代における、この書の人気の高さが窺われる。この書物のなかでは、様々な国の風俗習慣が紹介されており、エジプトについては下記のような記述がなされている。

Their women in old tyme, had all the trade of occupiynge, and brokage abrode, and reuelled at the Tauerne, and kepte lustie

chiere: And the men satte at home spinningg, and woorkyng of  
Lace, and suche other thynges as women are wonte. The men  
bare their burdeins on the heade, the women on the shulder. In  
the easemente of vrine, the men rowked doune, the women  
stoode vprighte. (Watreman 1:45)

エジプトでは、女性が酒場で浮かれ騒ぎ、逆に男性は家において糸を紡ぎレースを編むとされ、キリスト教社会の道徳・倫理観とは大きく異なる世界として、この未知の国が紹介されている。実は、ボーマスの描く男女の逆転したエジプト社会の様子は、古代ギリシヤの歴史家ヘロドトスの執筆した『歴史』の記述に倣ったものである。ヘロドトス自身の書物は、ようやく1584年になって英訳・出版され、多くの英国人の目に触れるようになるが、人々はボーマスの書物の翻訳やヘロドトスの翻訳を通して、そこに記された不可思議なエジプトの風俗・習慣を何ら疑うことなく信じ込んだのであろう。

続いて、エジプトの風俗習慣を伝えて重要と思われる近代初期の文献は、レオ・アフリカヌス (Leo Africanus) の『アフリカの歴史と記述 (*History and Description of Africa*)』(1526)である。この書物は1600年にジョン・ポーリー (John Pory) の英訳が出版され、シェイクスピアも『オセロ』の執筆に際して参考にしたことが知られている。<sup>2</sup> この書の中でも、エジプトは男女の役割の逆転した、奇妙な異文化社会として描かれている。

... They couer their heads and faces with a kinde of blacke  
scarfe, through which beholding others, they cannot be seene  
themselues. Vpon their feet they weare fine shooes and  
pantofles, somewhat after the Turkish fashion. These women  
are so ambitious & proud, that all of them disdain either to spin  
or to play the cookes: wherefore their husbands are constrained

to buie victuals ready drest at the cookes shops . . . Also they vouchsafe great libertie vnto their wiues: for the good man being gone to the tauerne or victualling-house, his wife tricking vp her selfe in costly apparell, and being perfumed with sweet and pretious odours, walketh about the citie to solace her selfe, and parley with her kinsfolks and friendes. (314)

アフリカヌスもまた、エジプトの女性たちはキリスト教ヨーロッパ社会にみられる一般的な家事労働にたずさわることなく、彼女たちが男尊女卑のしがらみから解放されて自由を謳歌している様子を伝えている。いくつかの書物を通して英国人は、エジプト社会が男女逆転の世界であるという固定観念を抱くようになったのかもしれない。

こうした言説は、17世紀半ばに至っても、英国の医師ジョン・ブルワー (John Bulwer) の執筆した『アンソロポメタモーフォシス (*Anthropometamorphosis, or, The Artificial Changeling*)』(1650) のなかにその痕跡を残している。<sup>3</sup> この書は、比較文化人類学の端緒を成す書物のひとつとして知られているが、そこには、エジプト人の男性には赤子に乳をやる乳房があり、女性には乳房はなく、男のような胸をしているという記述が存在するからである。ヘロドトス以来、男女の逆転した世界としてのエジプトは、英国の人々の想像力に働きかけ、そこに暮らす人々の身体的特徴にまでも影響を及ぼしたといえる。古代以来、近代初期に至るまで、エジプトという国は、男女の立場の逆転した異文化国家として、あるいは男女の性別までもが入れ替わってしまった不思議な国として、英国の人々に理解されていたことがわかるのである。

## (2) 没落した民族としてのエジプト人表象

しかし、そうした過去の知識に依存した、誤解に満ちたエジプト像ばかりが蔓延していたと考えることは誤りである。16・17世紀には新たな旅行記や見聞録から得た、より正確な近代初期エジプトの姿も英国に伝搬するようになってきていた。

16世紀の半ば1542年に、旅行家アンドルー・ボード(Andrew Borde)の『知識の紹介の第一の書(*The Fyrst Boke of the Introduction of Knowledge*)』が出版されている。ボードは旅行家らしく、想像上のエジプトではなく事実に基づいた当時のエジプトの様子を伝えようとしている。<sup>4</sup> オスマン=トルコの侵略により、エジプトは異国人で溢れ、多くのエジプトの民が国外へ逃れたという(“*Ther be few or none of the Egiptcions that doth dwel in Egipt, for Egipt is repleted now with infydele alyons.*” 217)。いまやそこに暮らすエジプト人の数はごく少数となり、彼らの存在は異教の徒にとって代わられてしまった事実を、ボードは記している。

同様の記録は、旅行家ジョージ・サンデイス(George Sandys)の『1610年に始まった旅の物語(*A Relation of a Iourney Begvn Anno Dom. 1610*)』と題する書物のなかにも見いだすことができる。<sup>5</sup> サンデイスは、エジプトの現状を次のように記している。

*The Egyptians of the middle times, were a people degenerating from the worth of their ancestors; prone to innouations, deuoted to luxury, cowardly cruell; naturally addicted to scoffe and to cauill, detracting from whatsoever was gracious and eminent. Those that now inhabite the countrey, are for the most part Moores. Turkes there are many, and Jewes, which reside onely in Cities; store of Arabians, and not a few Negroes. Of Christians, the natiue Coptics are the most in number: some Greeks there*

be, and a few *Armenians*. (108-109)

エジプト人たちは、古代文明を築き上げた先祖たちの栄光からは墮落した民となり、祖国の地は、他国から移入してきた異国人たちに占有されてしまっているという。本来のエジプト人に代わって、現在のエジプトで暮らすのは、主にムーア人、トルコ人、ユダヤ人、といった人々であると報告され、読む者を驚かせる。

こうした近代初期エジプトの様子は、1637年に出版された旅行家ヘンリー・ブラント (Henry Blount) の書『レヴァントへの旅 (A Voyage into the Levant)』のなかにも辿ることができ、彼の書物では、今やエジプトの民が過去の偉大な文明からはほど遠い民族へと変貌してしまった様が語られているのである。<sup>6</sup>

... whatsoever little memory of old Ceremonies, might have been left in *Egypt*, hath utterly perished in their frequent oppressions ... this of the *Turkes*; and the former of the *Circassian Mamalukes*; which beside the change of ceremony, have corrupted all the ingenious fancy of that Nation into ignorance, and malice.... (49)

ブラントによれば、オスマン＝トルコの侵略により、エジプトは司法も行政も完全にトルコの支配下におかれることとなったという。 (“Now as for the *Iustice, and Gouernment, it is perfectly Turkish. ...*” 51) イスラム世界の覇権がエジプトという国の政治と文化を悉く破壊し、駆逐してしまった様子が窺われる。これらの例が示すように、近代初期のエジプト人に対する記録には、古代の繁栄から没落し墮落した民族との記述が散見されるのである。

### (3)英国社会と偽エジプト人

しかし時期を同じくして出版された書物の中には、エジプトの民が先祖より受け継いだ秘技やその神秘性に言及した記録もまた残されている。医学、宗教、科学、そして秘教など、様々な分野の著述で知られるトマス・ブラウン(Thomas Browne)は、その著書『レリギオ・メデイキ (*Religio Medici*)』(1643)のなかで、エジプトの民の有する神秘性を指摘する。<sup>7</sup>

... *Aristotle*, I confess, in his acute and singular Book of Physiognomy, hath made no mention of Chiromancy, yet I believe the *Ægyptians*, who were nearer addicted to those abstruse and mystical Sciences, had a Knowledge therein; to which those vagabond and counterfeit *Ægyptians* did after pretend, and perhaps retained a few corrupted Principles, which sometimes might verify their Prognosticks. (157)

ブラウンによれば、古代エジプト人は神秘科学に耽溺していたという。そして偽エジプト人たちも、そうした神秘的能力を身につけている振りをし、あるいは実際に多少の原則を身につけていたらしいというのである。エジプト人たちが、占いなどの神秘的能力を有するという考えが、当時の人々の間に広まっていたことが理解される。ここで「偽エジプト人 (“counterfeit *Ægyptians*”）」という表現をブラウンが使用している点は興味深い。果たして、近代初期英国社会に紛れ込んだ「偽エジプト人」とはどのような人々であったのであろうか。

G. B. ハリソン(G.B.Harrison)の編纂した『エリザベス朝日誌 (*Elizabethan Journal*)』の頁をめくると、英国におけるエジプト人に関する犯罪記事にいきあたる。1595年1月10日の記事では、ジュディスという詐欺師が未亡人を誑かし、食器類を騙し取ろうとした様子が詳細に語られている。

The next morning, intending to cosen the widow of her plate also, Judith brought the head and legs of the turkey in a basket to the window, and began to tell the widow that she must lay one leg under the bed and the rest in other places; but the widow having by this discovered the stones in the yarn knew herself to be cozened and caused Judith to be apprehended.

This Judith hath long used her trade cosenage, wandering about the country in company with divers persons that call themselves Egyptians. For that kind of life she was condemned to die at Salisbury, but afterwards had her pardon.

(G. B. Harrison, *A Second Elizabethan Journal*. 6)<sup>8</sup>

ここに記されたジュデイスという詐欺師は、自らをエジプト人と名乗る者たち (“divers persons that call themselves Egyptians”) と行動を共にし、数々の詐欺を働いてきたという。この「エジプト人と名乗る者たち」こそ、トマス・ブラウンの記した「偽エジプト人」なのかもしれない。同じく『エリザベス朝日誌』には、1601年2月16日の記録として、二人のエジプト人の女が裁かれたという記事が収録されている。

At the Sessions two women, by name Joan Morgan and Anne Simpson, were found guilty of being seen and found in the society of vagabonds commonly called Egyptians, and call themselves Egyptians. The former put herself guilty and pleaded her pregnancy, but being found not pregnant by a jury of matrons, she is condemned to be hung; the latter likewise pleading pregnancy was reprieved, it being found by the jury of matrons that she is pregnant.

(G. B. Harrison, *A Last Elizabethan Journal*. 155)<sup>9</sup>

この記事に記された二人の女の罪状は、人々からエジプト人と呼ばれ、自らもまたエジプト人と称する浮浪者の集団に加わっていたという事実である。これらの記事から、英国においてエジプト人という呼称は、一般的に浮浪者や悪党を指すものとして使用されていたらしいことが理解されるのである。

『ジプシーの正体 1500 - 2000 (*Gypsy Identities 1500-2000: From Egipcians and Moon-men to the Ethnic Romany*)』の著者デヴィッド・メイヨール (David Mayall) によれば、英国では既に 1530 年に流浪の民ジプシーを取り締まる法律が公布されている。英国におけるジプシーの存在はそれ以前から記録に現れるが、移民として英国に到着し、流浪の民となる彼らの存在を政府が警戒するようになった社会背景には、食料不足や疫病の蔓延があった。急速な人口増加を経験する英国社会は慢性的な食料不足に落ち入っており、加えて流浪民による疫病の拡大は、政府にとって大きな脅威であった。ジプシーを取り締まろうとする法律は、当初、英国に入国するエジプト人を対象としたが、1554 年に公布された法では、自らをエジプト人と称する輩が含まれ、1564 年の法では、偽エジプト人や彼らの集団に属し行動を共にする者たちとその定義を拡大している (Mayall 61)。海外から英国社会に流入した流浪の民は、彼らの集団のなかに社会の底辺に生きる浮浪者や貧民を吸収していったことが、法令の対象の変化からわかるのである。

1605 年に出版された、カンタベリーの大主教ジョージ・アボット (George Abbot) の『世界の簡潔な記述 (*A Brief Description of the whole WORLDE*)』には、こうしたエジプト人について次のような記述が見受けられる。<sup>10</sup>

Although the Countreie of Egypt do stand in the selfe same Climate, that *Mauritania* doth, yet the inhabitants there, are not black, but rather dunne, or tawnie. Of which colour, *Cleopatra*

was obserued to be: who by enticement, so wanne the loue of *Iulius Cesar*, and *Anthonie*: And of that colour do those runnagates (by deuices make themselues to be) who goe vp and downe the world vnder the name of *Egyptians*; being in deed, but counterfeites, and refuse, or rascalitie of many nations. (K2 recto-verso)

アボットによれば、エジプト人は灰褐色あるいは黄褐色の肌をしており、クレオパトラもまたそうした肌の色をしていたはずだという。更に、ひとつの場所に定住することのない流浪の民たちは、自らの肌の色を浅黒くし、エジプト人だと名乗って、あてどない放浪の旅を続けていることが記されている。すなわちその実態は、家を持たず、放浪のうちにその生涯を終える下層民たちなのである。

また1607年に出版された『法律辞典 (*A Law Dictionary*)』には、「エジプト人」という項目が掲げられている。書物を執筆したケンブリッジ大学の法学者ジョン・カウエル (*John Cowell*) は、この項目に次のような定義を付している。<sup>11</sup>

*Egyptians*, We commonly call them *Gypsies*, and by our Statutes, and the Laws of England, they are a counterfeit Kind of Rogues, that being *English* or *Welsh* people, accompany themselves together, disguising themselves in strange Habits, blacking their Faces and Bodies, and framing to themselves an unknown Language, wander up and down, and under Pretence of telling of Fortunes, curing Diseases, and such like, abuse the Ignorant common People, by stealing all that is not too hot or too heavy for their Carriage. (“*Egyptians*” *A law Dictionary*)

ここに記されているように、英国では自らをエジプト人と偽る流浪の民は一般にジプシーの名で呼ばれた。彼らは異国民のなりをして国中を放浪し、未来を予言したり病を治すふりをして、無教養な人々を騙すことにより生きながらえていたのである。彼らは占い師として広く知られており、手相占い (palmistry)、額占い (metoposcopy)、生贄の内蔵占い (aruspicy)、水占い (hydromancy) など、様々な占い手法を駆使して、人々を騙したという (Mayall 61)。すなわち近代初期英国社会における彼らは、詐欺師であり、また時には盗人であったのである。

#### (4) 「悪党文学」にみる偽エジプト人表象

劇作家トマス・デッカー (Thomas Dekker) は、1608年に『ランプと蠟燭の火 (*Lantern and Candle-light*)』と題する書物を出版している。デッカーの書は、当時の「悪党文学 (Rogue Literature)」の範疇に入れられるもので、時代を映し出すという点で、一種のルポルタージュと呼べるであろう。<sup>12</sup> それは、読む者に裏社会の危険性を教えるとともに、犯罪者たちの世界を垣間みたいという読者の好奇心をくすぐる役割を果たすものであった点で興味深い。デッカーは著書の中で、エジプト人のことを記している。

They are a people more scattered than Jews, and more hated. Beggarly in apparel, barbarous in condition, beastly in behavior, and bloody if they meet advantage. A man that sees them would swear they had all the yellow Jaundice, or that they were Tawny Moors' bastards, for no Red-ochre-man carries a face of a more filthy complexion. Yet are they not born so; neither has the Sun burnt them so, but they are painted so; yet they are not good painters neither, for they do not make faces but mar faces. By a byname they are called Gypsies; they call themselves Egyptians.

Others in mockery call them Moon-men. (Kinney 243)

デッカーは、国内を放浪する浮浪者の集団が、人々から忌み嫌われていると記している。彼らは、乞食のような身なりをし、自ら肌の色を黒くすることによって、エジプト人を装うという。そうした彼らを人々はジブシーと呼び、「ムーン・メン」の蔑称で呼ぶこともあったとデッカーは証言する。

Their name they borrow from the Moon, because, as the Moon is never in one shape two nights together, but wanders up and down Heaven like an Antic, so these changeable-stuff-companions never tarry one day in a place, but are the only, and the only base, Runagates upon earth. (Kinney 243)

常に変化し続け、移動し続ける月は、彼らの象徴であり、そうした意味においてまさに「月の民(ムーン・マン)」こそが、彼らにふさわしい俗称なのである。

同時代に出版され、やはり「悪党文学」のひとつに数えられるものに、サミュエル・リッド (Samuel Rid or Rand) の『手品や奇術の技 (*The Art of Iugling or Legerdemaine*)』(1612) があるが、この書も、偽エジプト人たちの実態を知るうえで重要な手がかりを与えてくれる。<sup>13</sup>

Certaine Egiptians banished their cuntry (belike not for their good conditions) ariued heere in England, who being excellent in quaint trickes and deuises, not known heere at that time among vs, were esteemed and had in great admiration, for what with strangenesse of their attire and garments, together with their sleights and legerdemaines, they were spoke of farre and neere, insomuch that many of our English loyterers ioynd with them,

and in time learned their craft and cosening. The speech which they vsed was the right Egiptian language, with whome our Englishmen conuersing with, at last learned their language. These people continuig about the cuntry in this fashion, practising their cosening art of fast and loose, and legerdemaine, purchased to themselues great credit among the cuntry people, and got much by Palmistry, and telling of fortunes: insomuch they pittifully cosoned the poore cuntry girles, both of mony, siluer spoones, and the best of their apparrell, or any good thing they could make, onely to heare their fortunes. (15-16)

リッドによれば、祖国を追われたエジプトの民は英国に流入し、彼らの異国情趣あふれる風俗や珍しい手品の技は、あちこちで話題となったという。やがて英国社会の底辺に巣くう浮浪者たちの中にも、彼らの集団に加わり、生活を共にする者たちが現れるようになった。彼らは共に村々をまわり、手品や占いの技を駆使して、純真な村人たちから衣服や銀のスプーンをまきあげたとされる。リッドのパンフレットのタイトルに「トランプやサイコロゲームでの詐欺に注意するようにとの警告 (“cautions to beware of cheating

THE  
**Art of Iugling or**  
**Legerdemaine.**

**VV**herein is deciphered, all the conueyances of Legerdemaine and Iugling, how they are effected, &c where in they chiefly consist.

Cautions to beware of cheating at Cardes and Dice.

The detection of the beggerly Art of Alkimistry,

&c,  
The foppery of foolish confounding Charms.

All tending to mirth and recreation, especially for those that desire to haue the insight and private practise thereof.

By **S. R.**

*Quod non est a capite, numerus est sapientie.*

---

Printed at LONDON for T. B. and are to be solde by **SAMUEL RAND**, neere Holborne-bridge. 1682.

リッドのパンフレットのタイトル

at Cards and Dice”）」という一文が添えられているように、彼のパンフレットは村人たちを偽エジプト人によるこうした犯罪被害から守ることにあった。

近代初期の英国における、エジプトに対する理解やエジプトの民に対する人々の印象は、このように錯綜している。男女の立場の逆転した国というヘロドトス以来の考え方と共存する形で、彼らは偉大な古代文明から墮落した民族であり、国を追われて英国に辿り着いたあげく放浪生活を強いられることとなった流浪の民であった。やがて英国社会にまぎれこんだ彼らは、社会の底辺に生きる浮浪者たちと交わり、純朴な民衆を誑かす詐欺師でありペテン師であるという、負のイメージを背負わされることとなったのである。それではシェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』においては、こうしたエジプト人のイメージがどのように組み込まれ、展開されているのかについて考察していきたい。

### Ⅲ. シェイクスピア劇におけるエジプト女王の表象

#### (1) 劇中に描かれたエジプトにおける男女の逆転

近代初期の英国において、男女の役割の逆転した世界としてのエジプト観が民衆の間に広く浸透していたことは、既に述べたとおりである。シェイクスピアが、『アントニーとクレオパトラ』の執筆に際して、こうした民衆の抱くエジプト観を巧みに利用しつつ、主人公たちの人間関係を描き出そうとしている点は興味深い。シェイクスピアは劇のなかに、男女関係の逆転を揶揄する台詞を繰り返し挿入することによって、観客の期待するエジプト観をくすぐりながら、アントニーとクレオパトラの力関係を描いているのである。

第一幕四場において、遊興にふけるアントニーに軽蔑のまなざしを向けるオクタヴィアス・シーザー (Octavius Caesar) は、アントニーとクレオパト

ラの関係に男女の立場の逆転を読み取っている。

From Alexandria

This is the news: he fishes, drinks, and wastes  
The lamps of night in revel; is not more manlike  
Than Cleopatra; nor the queen of Ptolomy  
More womanly than he; (I. iv. 3-7)

オクタヴィアス・シーザーは、おおよそ勇者には相応しくない行状にふけるアントニーの様子に侮蔑を露わにする。「あいつよりもクレオパトラのほうが男らしいし、トレミーの女王よりも、あいつのほうが女らしい」というオクタヴィアス・シーザーの台詞は、二人の力関係の逆転を見事に言い当てる。しかしこの箇所を材源となっているプルタルコス『英雄伝』に辿ると、材源の記述は少々異なっている。

... he yeilded him selfe to goe with Cleopatra into Alexandria, where he spent and lost in childish sports (as a man might say) and idle pastimes, the most pretious thing a man can spende, as Antiphon sayth: and that is, time. (Bullough 275)

『英雄伝』の中には、アントニーの遊興を「子どもじみた (“childish”)」、 「怠惰な (“idle”)」と喩える修飾語はあるものの、女性的とする表現は見当たらない。<sup>14</sup> オクタヴィアス・シーザーの台詞がシェイクスピアの創作であり、誇張であることに気付かされる。シェイクスピアは、意図的に二人の関係に男女逆転の構図を当てはめ、観客の意識にあるエジプト観に訴えかけようとしていることが理解されるのである。

また、クレオパトラが語って聞かせる、アントニーに女の衣装を着けさ

せ、自らはアントニーの名剣フィリップパンを腰に下げた、というくだりも男女の役割逆転の戯画化として、観客に鮮明な印象を残す。

... and next morn,  
 Ere the ninth hour, I drunk him to his bed;  
 Then put my tires and mantles on him, whilst  
 I wore his sword Philippan. (II. v. 20-23)

プルタルコスには存在しないこのエピソードは、シェイクスピアがギリシヤ神話に描かれたリュディアの女王オムパレー (Omphale) の物語に取材したもので、ヘラクレス (Hercules) は3年間女装して女王に仕えたという。<sup>15</sup> クレオパトラのこの台詞を耳にすることによって、女王は凛々しい勇者に、他方、勇者アントニーは華麗な衣装を身にまとう女性へと変身する様を、観客は鮮やかに想い描くこととなる。しばし材源のプルタルコスから離れ、わざわざ神話のエピソードを脚色しながら、主人公たちのイメージを重ねるところに、男女の逆転の様子を観客の脳裏に焼き付けようとするシェイクスピアの工夫が窺えるのである。

更にこの他にも、男女の逆転の構図を舞台上に浮かび上がらせることによって、観客の潜在意識を刺激しようとするシェイクスピアの仕掛けは存在する。プルタルコスの『英雄伝』ではとりたてて言及されることのないクレオパトラの出陣のエピソードが、舞台上の場面として生々しく再現され、女王の男性性が前面に押し出される演出である。<sup>16</sup> クレオパトラは出陣に際して、自らもまた戦いに身を投ずることを、熱を帯びた口調で宣言する。

Sink Rome, and their tongues rot  
 That speak against us! A charge we bear i' th' war,  
 And as the president of my kingdom will

Appear there for a man. Speak not against it,  
I will not stay behind. (III. vii. 15-19)

「王国の元首として、男に代わって出陣するのだ」というクレオパトラの台詞は、一国の元首として、そして男として、前線に向かおうとする彼女の勇猛果敢さを余すところなく表現する。それは男性化した女王の存在を観客の心に鮮やかに印象づけることに成功している。同時に、この台詞のすぐ後に発せられるキャニディアス (Canidius) の台詞が、劇世界における男女の役割の逆転を観客の心に刻み付ける働きをして、大いに効果的である。

... but his whole action grows

Not in the power on't. So our leader's [led],  
And we are women's men. (III. vii. 68-70)

キャニディアスが言うように、将軍アントニー自身がクレオパトラの指揮下にある以上、まさにアントニーの軍勢は、「女の部下 (“women's men”）」に他ならない。ヘロドトス以来、近代初期まで連綿と連なる男女逆転の世界としてエジプトのイメージは、『アントニーとクレオパトラ』の劇世界にも取り込まれている。シェイクスピアは、観客たちが心に抱くエジプトに対する固定観念を巧みに利用しながらを、主人公たちの立場の逆転を用意周到に作品のなかに組み込んでいるのである。それでは、アントニーは如何にしてクレオパトラの支配のもとに絡めとられたのか、エジプトにおける性の逆転を創出させているクレオパトラを、シェイクスピアはどのような表象を通して、劇中に描き出しているのかについて考えてみたい。

## (2) 「ジプシー女」としてのクレオパトラ

劇の冒頭の台詞なかに「ジプシー」という語が顔を出す。フィロ (Philo)

が、将軍アントニーはその勇猛さをすっかり失い、今では「ジプシー女の情欲をさますふいご、団扇になりさがっている」と揶揄するのである。

...his captain's heart,  
Which in the scuffles of great fights hath burst  
The buckles on his breast, reneges all temper,  
And is become the bellows and the fan  
To cool a gipsy's lust. (I. i. 6-10)

かつての英雄アントニーの勇姿を知る軍人たちからすれば、エジプト女王として君臨するクレオパトラとて、勇者を誑かし墮落させる卑しい「ジプシー女」に他ならないのかもしれない。しかし近代初期の英国において、放浪の旅に身を委ねる人々を指す「ジプシー」との蔑称が、クレオパトラの比喩として使われている点は興味深い。作品におけるクレオパトラのイメージを決定するうえで、重要な役割を果たす台詞の導入である。

この場が続いて、チャーミアン (Charmian) が占い師に未来を占ってもらう短い場面が挿入されている。占い師との無邪気なやり取りながら、占いという秘技に心酔するエジプト人の神秘さが強調され、その後のアントニーの登場に向けて効果的な場面展開である。舞台に姿を現したアントニーは、次々に舞い込む戦況の報告に動揺を隠しきれない。クレオパトラの誘惑を「強固なエジプトの足枷 (“These strong Egyptian fetters” I. ii. 116)」と喩え、「女王の魔力 (“this enchanting queen” I. ii. 128)」から自らを解き放つことができぬなら、破滅を迎えることになるであろうという彼の自戒を込めた台詞が聞かれる。アントニー自身の台詞を通して、エジプト女王の魔性がことさら強調されるという手法である。こうした台詞は、「ジプシー女」への言及と相まって、その妖しげな魅力を増幅させ、男女の逆転をもたらせている女王の魔性を描き出しながら、同時に英国の階級社会の外側に位置する

流浪の民のイメージを、巧妙にクレオパトラ表象に定着させることになるのである。

更にシェイクスピアは、敵将ポンペー (Pompeius) にもクレオパトラの魅力を「魔術 (“witchcraft” II. i. 22)」との連想で語らせている。舞台上の様々な登場人物の口を通して、魔性の女王のイメージをたたみ掛けるよう繰り返すことにより、場面展開と並行して神秘的な「ジプシー女」としてのクレオパトラ像を観客の心に焼き付けるよう工夫がなされているのである。

... But all the charms of love,  
Salt Cleopatra, soften thy wan'd lip!  
Let witchcraft join with beauty, lust with both,  
Tie up the libertine in a field of feasts,  
Keep his brain fuming; (II. i. 20-24)

ここに使われている “wan'd” という語は、校訂に際して問題となる語ではあるが、ドーバー・ウィルソン (Dover Wilson) のように「青白い (“wan”)」とするのではなく、アーデン版第3シリーズの編者ジョン・ワイルダース (John Wilders) の指摘するように、「衰えかけた (“waned” = faded, declined, like the waning moon)」と解釈すべきであろう。<sup>17</sup> 「恋の魔術で、そのしなびた唇に潤いをもたせ」という日本語訳では十分に表現しきれないものの、陰りいく月のように絶頂期を過ぎてしまったかつての若さを、魔術の力で再び満月のように変化させ取り戻すことを、台詞のイメージとして含んでいる。クレオパトラの恋の秘策が魔術であり、女王の存在が劇の中で度々イシスの女神の化身として表されていることを念頭におけば、月のイメージと結びつけられていることの重要性を無視することはできない。「ジプシー」たちがしばしばその名で呼ばれたという、満ちては欠ける月のイメージを重ね合わせた「月の民」との連想が、この語にはふさわしいからである。

また、この月のイメージは、クレオパトラの変幻自在の魅力をも象徴する。エノバーバス (Enobarbus) が口にするように、クレオパトラは「年齢も彼女を衰えさせることはなく、慣れたからといって、彼女の無限の変化ゆえに決してつまらないものにはなりはしない (II. ii. 234-5)」という。まさに「無限の変化 (“Her infinite variety” II. ii. 235)」と喩えられるごとく、クレオパトラは決して男を飽きさせることがない。

しかしこの変幻自在の存在である月のイメージは、劇の中では両刃の剣の働きをもする。シェイクスピアは更にアントニーのこぼに託して、クレオパトラを月に喩えさせている。

Alack, our terrene moon  
Is now eclips'd, and it portends alone  
The fall of Antony! (III. xiii. 153-55)

「我がこの世の月も今や月食となり、アントニーの破滅を告げる前兆となっている」とのアントニーの台詞は、月の象徴とされるクレオパトラの心変わりやを喩えて効果的である。絶えず変化する月の満ち欠けをして、抗うことのできない魅力と感じていたアントニーの皮肉な思いがここにある。「無限の変化」と呼ばれた女王は、敗北の色濃いアントニーに背を向け、上げ潮に乗る権力者オクタヴィアス・シーザーにいとも容易くなびく素振りを見せるのである。

クレオパトラの裏切りに激昂したアントニーは、不実な女王 (“this false soul of Egypt!”) に対して、「死を呼ぶ魔女 (“this grave charm”）」や「ジプシー (“gipsy”）」という残酷な呼称を投げかける。

Betray'd I am.  
O this false soul of Egypt! this grave charm,

Whose eye beck'd forth my wars and call'd them home,  
Whose bosom was my crownet, my chief end,  
Like a right gipsy, hath at fast and loose  
Beguil'd me to the very heart of loss. (IV. xii. 24-28)

引用文中の“fast and loose”は、ジプシー手品への言及で、疑うことを知らない善良な輩を誑かす際に、ジプシーが用いる騙しのテクニックのことをいう。スカーフの固く結ばれた結び目を、一瞬の早業で解いてみせる手品を指す表現である。この極めて単純な手品に端を発して、この表現はジプシーたちが用いる巧妙な目くらましの早業の総称として、彼らの詐欺の手法を意味するものとなる。作品のなかでは、ジプシーたちが得意とする詐欺の手法が台詞に埋め込まれ、クレオパトラに人を騙し墮落させてしまうという「ジプシー女」のイメージを重ねることが周到に行なわれている。まさに「ジプシー女」である彼女の畏にはまったアントニー自身の破滅が語られるのである(“The noble ruin of her magic” III. x. 18).

... she, Eros, has  
Pack'd cards with Caesar's, and false-play'd my glory  
Unto an enemy's triumph. (IV. xiv. 18-20)

あたかも「ジプシー」たちが、カードゲームで民衆を誑かすように、アントニーもまたクレオパトラのいかさまゲームに振り回され、オクタヴィアス・シーザーの前に敗北を喫したことを台詞は観客に伝えている。台詞の中に現れるカードゲームやいかさまへの言及は、サミュエル・リッドの著作に見られるように、「ジプシー」たちの常套手段であったこと思い浮かべるなら、劇のなかで「魔術」、 「魔性の女」、そして「死を呼ぶ魔女」などのイメージを繰り返すという手法を通じて、クレオパトラは「ジプシー女」としての表

象を纏わされていたことにあらためて気付かされるのである。

#### IV. 他の作品に描かれたクレオパトラ表象への挑戦

##### (1)他の作品におけるクレオパトラ像との距離

シェイクスピアが材源としたプルタルコスの『英雄伝』をはじめ、クレオパトラは多くの詩人や劇作家のインスピレーションを刺激し続けてきた。プルタルコスの描くクレオパトラは、狡猾な政治策略家としての印象が強く、エジプトの利益のためにアントニーを巧みに操つる。また1578年にロベール・ガルニエ (Robert Garnier) が筆を執った『マルク・アントニ (Marc Antonie)』は、ペンブローク伯爵夫人 (the Countess of Pembroke) ことメアリ・シドニー (Mary Herbert (Sidney)) によって1592年に『アントニーの悲劇 (The Tragedie of Antonie)』と題する英語翻訳がなされている。作品のなかに描かれるクレオパトラは、妻として、また子どもたちの母としての面影が前面に押し出され、女王に対する同情的な眼差しが顕著である。<sup>18</sup> 他方、伯爵夫人からの直接の依頼によって書かれたといわれるサミュエル・ダニエル (Samuel Daniel) の『クレオパトラの悲劇 (The Tragedie of Cleopatra)』(1594) は、アントニーの埋葬の後のクレオパトラの最後の苦悩が作品の主題となっている。アントニーの没落の原因となった魔性の女というよりも、クレオパトラの誇りと悲しみに焦点があてられることとなる点特徴的である。<sup>19</sup> いずれの場合も、王国を担う女王としての威厳とローマへ連行され、オクタヴィア (Octavia) をはじめ、衆目にさらされることへの屈辱が詩行に綴られている。

シェイクスピアの描く最終幕のクレオパトラは、まさにこうした多くの作品のなかに繰り返し描き出された女王像に挑戦するかのごとき様相をなしている点に注目したい。劇中のクレオパトラは、自分たちの運命が詩歌のなかで詠われ、舞台上に乗せられて面白おかしく演じられることを予見している。

「声の高い少年俳優が、まるで娼婦のようにエジプトの女王を演ずる」ことになろうとクレオパトラは自嘲する。

*Cleo.* Nay, 'tis most certain, Iras. Saucy lictors  
Will catch at us like strumpets, and scald rhymers  
Ballad 's out a' tune. The quick comedians  
Extemporally will stage us, and present  
Our Alexandrian revels: Antony  
Shall be brought drunken forth, and I shall see  
Some squeaking Cleopatra boy my greatness  
I' th' posture of a whore. (V. ii. 214-21)

かつて詩歌のなかに詠われたクレオパトラも、また戯曲に描かれたクレオパトラも、どれひとつとして女王の真の姿を伝えたものは存在しなかった。シェイクスピアはわざわざこうした台詞を挿入することによって、従来の詩歌や劇に登場する女王像とは全く異なった人物像を描き出そうとする自らの試みを、観客に伝えているのである。

他の人々の筆になるクレオパトラが、為政者であり、一国の女王であるのに対して、シェイクスピアの描くクレオパトラのなかには、ローマとエジプトという国同士の争いから、一步、身を引き、勝者と敗者を冷徹に見据えた眼差しが存在することを忘れてならない。

*Cleo.* My desolation does begin to make  
A better life. 'Tis paltry to be Caesar;  
Not being Fortune, he's but Fortune's knave,  
A minister of her will: and it is great  
To do that thing that ends all other deeds,

Which shackles accidents and bolts up change,  
 Which sleeps, and never palates more the dung,  
 The beggar's nurse and Caesar's. (V. ii. 1-8)

オクタヴィアス・シーザーとて、「幸運そのものではなく、幸運の女神に操られる僕に過ぎぬ、女神の意のままに動く召使いだ (“Not being Fortune, he's but Fortune's knave, / A minister of her will”）」と、女王は人間の運命の儂さを語る。シェイクスピアのクレオパトラは、皇帝や君主の支配する社会の外側に身を置く者だけが、見通すことができる真理を口にする。彼女は、悠久の歴史の流れのなかで、絶えず運命の女神によって操られてきた人間の生き様を言い当てる、まさに巫女のごとき存在である。国家の運命の浮沈、人間の人生の不可思議を探り当て、言い当てることができるというジプシーの神秘さがここには窺える。勝者として奢れる者として、勝利の美酒は一時の運命のいたずらにすぎない。この世に生を受けた者である以上、永遠の勝利を手にはすることはかなわず、やがては与えられし生の時間の終焉を迎えるのである。

そしてこの巫女のごとき神秘性をクレオパトラが身に纏う時、ジプシーに喩えられた彼女の俗世の存在は逆説的な意味において崇高さを獲得し、観客の前で偉大な女王としての威厳を取り戻すこととなるのである。このジプシー女から、歴史を超えて運命を見通すことの出来る偉大な女王への変身という逆展開こそが、シェイクスピアが作品のなかに綿密に織り込んできた流浪の民としてのエジプト人「ジプシー」のイメージの存在意義であり、劇において用意周到に準備された彼の戦略ではなかったか。シェイクスピアは、この逆展開の衝撃を観客にもたらすために、劇の前半を通して、通低音としての「ジプシー女」クレオパトラのイメージを台詞の中に縫い込み、紡ぎ出してくる必要があったのであろう。

My resolution's plac'd, and I have nothing  
Of woman in me; now from head to foot  
I am marble-constant; now the fleeting moon  
No planet is of mine. (V. ii. 238-41)

クレオパトラが、自らを指して「今やうつろいやすい月は私の星ではない」と断言するように、最終場面の彼女は、もはや変幻自在の存在ではなく、時空に君臨する永遠の存在である。いかに弾圧されようとも政府の取り締まりの網の目をすり抜け、流浪の民として官憲の裏をかいて生き続けるジブシーたちのように、クレオパトラもまたシーザーの君臨するローマ帝国の支配に絡めとられることはない。彼女をエジプト征服の戦利品としてローマに連行しようとする狡猾なシーザーの計画の裏をかいて、女王は毒蛇の毒で眠るかのような永遠の死を手に入れる。たとえこの世での戦いでは敗北を喫しても、あの世では愛するアントニーと結ばれることにより、永遠を手にする事によって、クレオパトラは地上の儂い勝利を嘲笑うのである。

... Methinks I hear

Antony call; I see him rouse himself  
To praise my noble act. I hear him mock  
The luck of Caesar, which the gods give men  
To excuse their after wrath. Husband, I come!  
Now to that name my courage prove my title!  
I am fire and air; my other elements  
I give to baser life. (V. ii. 283-90)

クレオパトラは、「アントニーがオクタヴィアス・シーザーの幸運を嘲笑っているのが聞こえる」ようだといい放つことによって、地上世界の盛者必衰

を言い当てる。彼女が「神々が幸運をお与えになるのは、後に不運をもたらす際の自分たちの怒りを正当化するためだから」と口にするように、人間の運命の有為転変は人知では計り知れないものなのである。

同時に彼女の台詞が観客に伝えようとするのは、男女逆転の世界を表出させる異文化世界の中心的存在ではなく、死後の世界では夫アントニーに仕える、健気な一人の女、妻としての自らの存在である。劇場を埋め尽くした観客は、この時、クレオパトラへの深い共感を抱くと共に、このエジプトの女王に階級を超えた親近感を覚え、この悲劇のエンディングに大きな満足感を経験したと考えられる。

## V. 結

シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』をめぐっては、近年、しばしばジェンダーの対立を劇世界に読み込もうとする現代人の視点からの批評が展開されてきた。<sup>20</sup> しかし、今一度、近代初期の人々の抱いたエジプトに対する、あるいはエジプト人に対する心象風景に立ち戻り、シェイクスピアが作品の詩行のなかに用意周到に埋め込んだ「ジプシー」表象と、「ジプシー女」クレオパトラが、最終場面での崇高な女王像へと変貌する逆展開の劇的クライマックスを再確認しておく必要があるのではないであろうか。当時の人々なら誰もが知っていたはずの流浪の民の表象を、シェイクスピアは巧みに利用しながら、他の詩人や劇作家が誰ひとりとしてなし得なかった劇のクライマックスへ観客を導くことに成功している。階級社会の外側に生きる流浪の民は、時としてその階級社会を支配する権力者の無力さを見抜くことができる。彼らは世界を支配しようとする者たちの権力の真の意味を、悠久の歴史という時間の流れの中で相対化し、その空しさを言い当てる洞察力を持つのである。その時、社会の底辺に生きる存在であったはずの流浪の民は、為政者にも勝る偉大さを獲得し、多くの人々の注目と共感を得ることと

なる。シェイクスピアは、まさにこの演劇的効果を劇のクライマックスにもってこることにより、他のアントニーとクレオパトラの物語とは、大きく異なる作品を観客に提供しようとしたのであろう。「ジプシー」表象を身に纏うクレオパトラの崇高な女王への変身は、近代初期英国に生きる観客の心に、まさに忘れ難い鮮やかな印象を残したと思われるのである。

註

- 1 Watreman の翻訳のタイトル全文は、*The Fardle of Facions: Containing the Aunciente Maners, Customes, and Lawes, of the Peoples Enhabiting the Two Partes of the Earth, Called Affricke and Asie*. である。この書物への言及は、John Michael Archer の *Old Worlds* においてもなされている (39)。
- 2 Africanus については、アミン・マアルーフ『レオ・アフリカヌスの生涯—地中海世界の偉大な旅人』服部伸六訳 (東京:リプロポート, 1989 年) を参照のこと。また拙著『『オセロ』とイスラム世界—17 世紀初頭のキリスト教ヨーロッパ世界が抱いた不安と葛藤』『同志社大学英語英文学研究』86・87 (2010) 参照のこと。
- 3 医師 John Bulwer (1606-1656) は、聴覚障害やジェスチャーに関する書物の執筆をしている。彼はコミュニケーションの手段としての身体的作用を解明する 4 つの書物を著し、そのひとつがこの *Anthropometamorphosis* (初版 1650, 第 2 版 1653 年) である。書物は、様々な国の人々によって実践されている人体への人工的な変形を調査・解説しており、現代の読者からしても興味深い。Bulwer 自身は自然のままの身体に人工的な技法によって変形を加えることを好ましくないと考えており、彼の同時代の人々が虚栄から自らの身体に変形を加えようとする流行を批判することを念頭に筆を執っている。現在、University of Oklahoma Library の提供する OU History of Science Collections で、書物の挿絵などが部分的に紹介されている。  
1 May 2013 (<http://ouhos.org/2010/06/16/john-bulwer-anthropometamorphosis>)  
*Anthropometamorphosis* は、Ania Loomba の *Shakespeare, Race, and Colonialism* にもこの書物への言及がある (119-120)。
- 4 Andrew Borde は、繰り返し大陸へ渡り、キリスト教圏のみならずキリスト教圏の外へも旅したという。彼の書物は、1870 年に F. J. Furnivall によって編纂され再出版されており、このなかで Borde の生涯については、Furnivall が詳しく記している。Ania Loomba の *Shakespeare, Race, and Colonialism* にも、この書への言及がある (115)。

- 5 Geroge Sandys (1578-1644) は、大陸から地中海東岸のレバント地方へと旅し、旅行記 *A Relation of a Journey Begun An: Dom: 1610. Foure Bookes. Containig a Description of the Turkish Empire, of Ægypt, of the Holy Land, of the Remote Parts of Italy, and Ilands Adioyning.* を執筆・出版した。彼の書は、近東（アラビア半島諸国を含むアジア南西部諸国）の情報源として、Ben Jonson, Robert Burton, Sir Thomas Browne, Abraham Cowley, John Milton 等に多くの影響を与えている。John Michael Archer の *Old Worlds* にも、この書への言及がある (41)。
- 6 旅行家 Sir Henry Blount (1602-1682) は、大陸からヴェニスを起点にバルカン諸国、コンスタンチノーブル、ロードス島、エジプト、アレクサンドリアへと旅した。広く中東を旅することを通して、イスラム圏やオスマン諸国の様子を自分の目で見て記述することが、彼の目標であった。彼は常に、キリスト教圏の外の国々には学ぶべき点が多々あると考えていたらしく、トルコ軍の様子や、トルコ社会のあり方、英国との貿易の重要性などを、書物の中で強調している。彼の旅行記は、国王 Charles I の目にとまるところとなり、1639 年 knight の爵位を授けられた。John Michael Archer の *Old Worlds* にもこの書物への言及がある (42)。
- 7 Sir Thomas Browne (1605-1682) は、オックスフォード大学で学位を得た後、アイルランド、モンベリエ、パドゥア、ライデンなどに滞在した。帰国後の 1635 年から 1636 年にかけて *Religio Medichi* の初稿を執筆したとされる。この書物は、大陸でも高く評価され、多くの翻訳版が世に出た。キリスト教信仰を軸として書かれているものの、自然史研究に基づいた議論がなされると共に、錬金術、占星術、人相学などへの言及も多い。John Michael Archer の *Old Worlds* にもこの書物への言及がある (44)。
- 8 この記事は、*Salisbury Papers*, v. 82 から *Elizabethan Journal* に収録されたものである。
- 9 この記事は、*Mid. Sess. Rolls*, i. 266. から *Elizabethan Journal* に収録されたものである。
- 10 George Abbot (1562-1633) は、オックスフォード大学で学んだ後、大学で教鞭をとるかたわら、1599 年に 37 歳の若さで *A Brief Description of the Whole World* を執筆・出版した。この書は多くの読者を獲得し、版を重ねることとなった。Abbot 自身は海外を旅したことはなく、書物の中に記述されたことはすべて、彼の読書から得られた知識である。やがて Abbot は、国王ジェームズズの指示のもと欽定訳聖書の編集に携わり、1611 年の聖書の完成と同時に、カンタベリーの大主教を任じられている。また慈善事業にも力を尽くし、1619 年、通称 Abbot's Hospital

の名で知られている the Hospital of the Blessed Trinity の建設を手がけた。John Michael Archer の *Old Worlds* にもこの書物への言及がある (42)。

- 11 辞典の正式名は *A Law Dictionary: or the Interpreter of Words and Terms Used Either in the Common or Statute Laws of Great Britain, and in Tenures and Jocular Customs.* である。John Cowell (1554-1611) は、ケンブリッジ大学で学んだ後、ロンドン主教 Richard Bancroft の勧めから、法律の研究へと身を捧げ、1584年にLLDの学位を授けられた。Cowellの最も有名な出版物は *The Interpreter* であり、これは法律用語の定義を記載した法律辞典である。この書の中で、Cowellは国王の絶対的権力を認め、議会は君主に仕えるべきであるとの定義をしていることから、1610年の議会で批判の槍玉に挙げられたいわく付きの書物でもある。Ania Loomba の *Shakespeare, Race, and Colonialism* にもこの書への言及がある (127)。

- 12 Rogue literature については、Arthur F. Kinney, *Rogues, Vagabonds and Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature* (Amherst: U of Massachusetts P.,1990) 11-57 を参照のこと。

- 13 この書物の本当の著者が誰であるかは不明。表紙には “By S. R.” と記され、その下に “Printed at London for T. B. and are to be sold by Samuel Rand, neere Holborne-bridge. 1612” との印刷が見られる。また献辞 “To the ingeniovs gentleman and louing father, Mr. William BVBB.” に付した署名には “SA: RID” の文字が見られる。これが Samuel Rid という名の著者なのか、それとも単に印刷出版業者である Samuel Rand という綴りの誤植なのかはわからない。 *Oxford Dictionary of National Biography* には、Samuel Rand という名前。同時代に存在する医師 (1588-1654) の名前が記されているのみである。Ania Loomba の *Shakespeare, Race, and Colonialism* にもこの書への言及がある (130)。

- 14 他の箇所において、“Caesar sayde furthermore, that Antonius was not Maister of him selfe, but that Cleopatra had brought him beside him selfe, by her charmes and amorous poysons” (Bullough 295). や “Now Antonius was made so subject to a womans will” (Bullough 296). とするプルタルコスの記事は存在するが、シェイクスピアはアントニーとクレオパトラの関係における男女の逆転を、台詞をとおして観客に繰り返し訴えている。

- 15 ギリシア神話 Omphale については、Arden 版 *The Third Series, Antony and Cleopatra* の Introduction (64-65) を参照のこと。

- 16 プルタルコスでは、むしろ敗戦となった場合を想定して、クレオパトラが自らの逃走経路を確保するために、陸ではなく海上での戦闘を訴えたことだけが記されており、男まさりなクレオパトラの言動を伝える記述は存在しない。“Cleopatra

forced him [Antonius] to put all to the hazard of battel by sea: considering with her selfe how she might flie, and provide for her safetie, not to helpe him to winne the victory, but to flie more easily after the battel lost” (Bullough 298).

<sup>17</sup> Wilders p.126. n.

<sup>18</sup> Bullough 5.358-406. 参照のこと.

<sup>19</sup> Bullough 5.406-449. 参照のこと.

<sup>20</sup> Marilyn French の研究に代表されるようなジェンダー研究. *Shakespeare's Division of Experience* (New York: Summit Books, 1981).

### Selected Bibliography

#### Primary Sources

Abbot, George. *A Brief Description of the Whole World*. London, 1605.

Blount, Henry. *A Voyage into the Levant: A Brief Relation of a Journey Lately Performed by Master H. B., Gentleman, by the Way of Venice*. London, 1637.

Boemus, Johann. *The Fardle of Facions: Conteining the Aunciente Maners, Customes, and Lawes, of the Peoples Enhabiting the Two Partes of the Earth, Called Affricke and Asie*. Trans. William Watreman. London, 1555.

Borde, Andrew. *The Fyrst Boke of the Introduction of Knowledge*. London, 1542.

Browne, Thomas. *Religio Medici: or the Religion of a Physician*. London, 1643.

Bulwer, John. *Anthropometamorphosis, or, The Artificial Changeling*. London, 1650.

Cowell, John. *A Law Dictionary: or the Interpreter of Words and Terms Used Either in the Common or Statute Laws of Great Britain, and in Tenures and Jocular Customs*. London, 1607.

Dekker, Thomas. *Lantern and Candle-Light*. London, 1608.

Harrison, G. B. *A Second Elizabethan Journal: Being a Record of Those Things Most Talked of During the Years, 1595-1598*. London: Routledge & Kegan Paul, 1974

---. *A Last Elizabethan Journal: Being a Record of Those Things Most Talked of During the Years, 1599-1603*. London: Routledge & Kegan Paul, 1974

Herodotus. *The Histories*. Trans. Aubery de Sélincourt. London: Penguin, 2003.

Leo, Africanus. *History and Description of Africa*. Trans. John Pory. London, 1600.

Rid, Samuel. *The Art of Iugling or Legerdemaine*. London, 1612.

- Sandys, George. *A Relation of a Journey Begun Anno Dom. 1610*. London, 1610.  
Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blackmore Evans. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Company, 1997.

#### Secondary Sources

- Archer, John Michael. *Old Worlds: Egypt, Southwest Asia, India, and Russia in Early Modern English Writing*. Stanford: Stanford UP, 2001.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. 8 vols. London: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Chernaik, Warren. *The Myth of Rome in Shakespeare and his Contemporaries*. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- Deats, Sara Munson. *Antony and Cleopatra: New Critical Essays*. New York: Routledge, 2005.
- Hall, Kim F. *Things of Darkness: Economies of Race and Gender in Early Modern England*. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Hamer, Mary. *Signs of Cleopatra: Reading an Icon Historically*. 2nd ed. Exeter: U of Exeter P, 2008.
- Hawkes, Terence. *Alternative Shakespeares, Volume 2*. London: Routledge, 1996.
- Kinney, Arthur F. *Rogues Vagabonds and Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature, Exposing the Lives, Times, and Cozening Tricks of the Elizabethan Underworld*. Amherst: U of Massachusetts P, 1990.
- Loomba, Ania. *Shakespeare, Race, and Colonialism*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Mayall, David. *English Gypsies and State Policies*. Hatfield: U of Hertfordshire P, 1995.
- . *Gypsy Identities, 1500-2000: From Egipcians and Moon-men to the Ethnic Romany*. London: Routledge, 2004.
- McPeck, James A. S. *The Black Book of Knaves and Unthrifths: In Shakespeare and Other Renaissance Authors*. Storres, Conn: U of Connecticut, 1969.
- Reynolds, Bryan. *Becoming Criminal: Transversal Performance and Cultural Dissidence in Early Modern England*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2002.
- Stone, James W. *Crossing Gender in Shakespeare: Feminist Psychoanalysis and the Difference Within*. New York: Routledge, 2010.
- Wilders, John, ed. *Antony and Shakespeare*. By William Shakespeare. The Arden Shakespeare: Third Series. London: Routledge, 1995.